然れども、バウサニアスは遺物の時代を距る數百年後の書に過ぎず。之を以て樣式の全系統を覆さんとするは誤れり。

七三、遺物遺跡の時代を決定し其の性質を明にするは、人類の過去を研究する考古學の目的の基礎たるのみ。此の個々の遺物遺跡に關する智識を綜合して、其上に組織的智識を建立せざる可からず。殊に文獻の貧弱なる時代及地方の人類過去の歷史を研究するは、考古學者の手に俟つこと最も多しとなす。考古學を以て單に遺物遺跡の個々に關する智識の供給者たりとし、或は古代の風俗文化を研究するのみが考古學なりとするは、考古學者の活動を制限せんとするものなり。一切人類の過去の研究は悉く考古學の分野に在り古代の人類の研究にまれ、古代の美術宗教の研究にまれ、自ら考古學者たるの態度に出る無くんば之を期する能はざる可し。吾人は歐洲考古學者が輓近埃及クリート島其他に於いて研究せる結果、建立せる組織的智識の大系を學ぶ時、其の綜合的方法と態度に就きて得る所多かる可し。今一々之が實例を述ぶるの暇無きを以て、考古學の研究方法に關しては姑く之を以て筆を措くことゝし、第四章後論に移る可し。

# 天滿天神の信仰の變遷（上）

文學士　長沼賢海

我が國神祇の中にて、天滿天神ほど其起原が比較的新しいにも係らず、之れに對する信仰が横にも縱にも變化に富むものは外にはあるまいと思ふ八幡神、春日明神、熊野神等もなか〳〵變化に乏

しくない樣であるが、天滿天神に比べたならば、いふに足らない樣に思はれる。此の變化の委細を研究することは容易ならざる問題であるが、私は特に之れを佛敎史の上より觀察した結果に就いて概略を述べやうと思ふのである。

一體日本文明の根底は佛敎に據るもの頗る多く俗神道の發達の如きは佛敎の刺戟によるもの頗る多く、其內容、形式共に佛敎から轉化したものと謂つて差支ない分子が頗る多く、天滿天神に對する信仰の如きも、其影響を受くること甚だ明瞭である。吾人はそこに多くの興味を感ずるものである。

今私の述べやうと思ふ所を大體左の樣な圖に表はして見た。

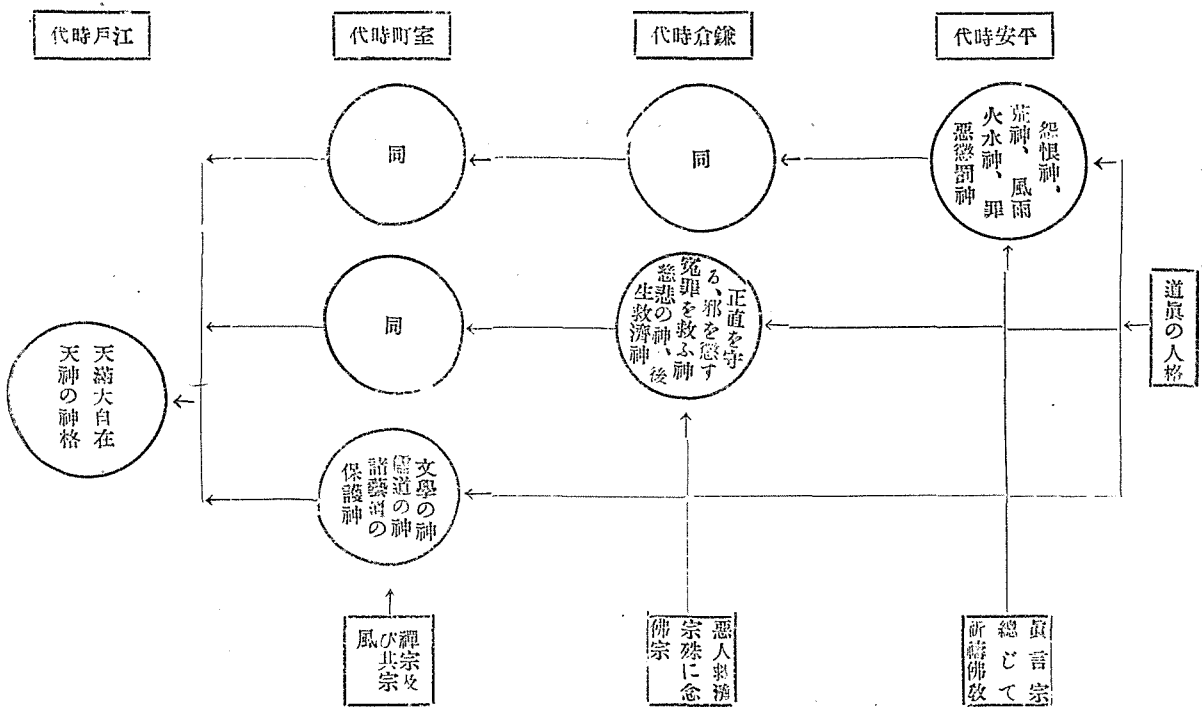
◎圖は次ページにあり

先づ平安時代から說かうと思ふ。

## 一　平安時代

道眞の薨去したのは延喜三年であつて、其後四十五年を經て、村上天皇の天曆元年に北野神社が出來、又其の薨去の年を去る九十一年一條天皇は正曆四年五月に使者を太宰府安樂寺の道眞の廟院に遣はされて、左大臣を贈られ、ついで十一月更に使者を遣はされて、正一位太政大臣を贈られた之より先、正曆二年には官幣を北野社にも奉らるゝことゝなり、之より後寬弘元年には始めて行幸せられた。

斯の如く僅々一世紀の間に、太宰權帥菅原道眞の祠が、神代以來の諸神祇にも增して、朝野の崇敬の尋常ならずなりたるに就いては、各種各樣の見界があらうと思ふが、大體論としては、時勢の影響たることに就いて、誰も異論はあるまい。權門勢家の榮華に耽ることこゝに百數十年、今や歡


平安時代
鎌倉時代
室町時代
江戸時代
怨恨神、荒神、風雨火水神、罪惡懲罰神
同
同
同
正直を守る、邪を懲す冤罪を救ふ神慈悲の神、後生救濟神
文學の神儒道の神諸藝術の保護神
天滿大自在天神の神格
道眞の人格
眞言宗 總じて新舊佛教
惡人往生 宗殊に念佛宗
禪宗及び其宗風

樂盡きて哀愁至らんとするの時、國家の中心たり支配者たる公卿は社會的にも、個人的にも奢侈遊堵に耽溺した結果獲得したる、治すべからざる惡疾を患へて體力は消磨せられ、精神は過度に過敏となり、婦人はヒステリーを免るゝもの少く、男子は更に激しい神經過勞症に惱むやうになつて、個人も社會も、擧げて怖しい罪惡觀に陷つて終つた。怖るべきは時代の風で、いまだ人生を解せざる小兒すら猶ほ甚しい罪惡觀に苦むものと考へられた。地獄、極樂の信仰の如きは痛く時人の腦裡を刺激し、賽の河原の苦業の信仰の如き又は、因果應報の怖るべき佛敎神話、佛敎圖說の如きも世に其の威力を逞うしたのである。

かやうな時勢に於ては、物忌、方違、咒詛、祈禱の如き人生の弱點に乘ずる習慣や風俗が、冷靜な理性を押除け、嚴密なる智力を蹂躙して、こゝに異つたる時代からは想像のつかぬやうな神秘が數多演ぜらるゝのである。菅神出世の一條は、一つはかゝる時勢の產物である。然かも吾人はこゝに特に眞言宗、又は他の佛敎に依て唱へられた祈禱の功德利生に促さるゝもの多きを否むことが出來ない。平たく、いや寧ろ露骨に謂へば、祈禱の行者が其の祈禱の効果を賣らんが爲め、聲を大にして道眞の怨靈の祟りを吹聽したと速言してもよいて道眞の薨後太宰府の人は安樂寺に廟所を創めて其靈を祀つた。世人は之れを私に天滿天神と號した。其の時代は判然しないが、恐らくは京都の人々が安樂寺の廟院を北野に勸請した頃から、道實に對して贈位贈官のあつた前後までの間に、稱へ始められたものであらう。

平安時代の終の頃に成つた史料に、既に此種の神號が明かに見ゐて居る。日本紀略には天滿天神と見ゐ、本朝世紀にも同じく天滿天神と見ゐ、扶桑略記には火雷神と見ゐ、菅家御傳記には天滿天

神と見に、北野緣起には北野自在天神と見に、最鎭記文には火雷天神と見に。かやうに神號がまち〳〵になつて居る。本朝世紀には「永延元年八月五日、始行北野聖廟祭祀宣命云、掛畏支北野爾坐天滿宮天神云々天滿天神之勅號始起此哉」とあるも遽に信じ難い。又菅家御傳記安樂寺學頭安修奏狀なるものを引いて「延喜五年八月十九日味酒安行依神託立神殿、稱曰、天滿大自在天神」（前後略）とあるも亦同斷である。又群書類從所收天滿宮託宣記に收むるものに「天曆元年丁未三月十二日酉時天滿天神託宣記」と顯する託宣あれど、果して正曆の記載なりや信を措き難く、此種神號の起原は明白でない。中右記大治五年四月廿八日の條には北野廟とあり、大鏡には北野宮とあり、伊呂波字類抄には唯だ北野とあり、正曆四年八月廿八日贈位勅使のため太宰府に下向せられた時、太宰府より奉れる解文に安樂寺菅丞相廟とある。かくまち〳〵なるは平安時代の末に至りても、いまだ天滿天神の神號の一定しなかつたことを察するに足るのである。宜なる哉。政事要略には、道眞の薨去を延喜四年にかゝげ、「其後號天滿天神、庶人皆歸之」とある。

「天滿大自在天神」の神號の意味は持經者などの唱へ初めたるものであらう。天滿大自在天神寶號記（續類從所收、永享六年愚極の著）には「夫天滿大自在天神七字之寶號者、諸佛心躰衆生妙用也、天滿則詮本躰也、所謂佛神無爲、不隨諸數也自在則表神用也、所謂應變無邊不動本際矣、大之一字、上讃天滿之體、下嘆自在之用焉、天神二字則總結名也」とあつて、怖ろしくむづかしい說明が附いたが、其起りはかやうな哲學的根據ある命名ではなかつたのであらう。道實が薨去すると其の靈が上天して梵天帝釋天宮に入りて、帝釋天から大政威德天の號を授けられ、其の眷屬十六萬八

千、毒龍、惡鬼、水火、雷電、風伯、雨師、害毒鄙神を率ゐて國土に遍滿したといひ出された結果天滿天神と號されたのである。大自在の三字は其脅屬を率ゐて自在に風雨水火を弄むだといふより起つた名稱とも見られ、又一は道眞の靈が大自在天宮に入りて、一萬二千八百人の隨身を率ゐて國土を荒したといふ信仰あたりから、附會された名稱かとも思はれる。

此の名號の由來から考へても、平安時代に於て菅神出世に取つては、道眞の靈が怨恨の神となつて、國土に禍ひするといふ恐怖心が非常なる力となつて居たことは爭はれない。永觀二年六月二十九日の安樂寺託宣（扶桑略記廿五に引用せらる。群書類從所收天滿宮託宣記にも載せられ、平安時代の終の頃世に出でしものか、永觀二年にありしといふ託宣の本文なりや多少疑ひあり）

我每日往帝釋宮、閻羅王宮、自在天宮、五天竺國、大唐長安城并西明寺、青龍寺新羅國郡武城、當州皇城、并當府、及諸國所々歸依古刹宮等也、我隨身伴類、一萬二千八百餘人、怨念恨、背世、貴賤、靈魂皆以集來、但无理含恨之輩、專不相共

とあるが如きは、之をあからさまに白狀したものである。こゝに注意すべきは不當の怨恨は天滿天神に係らぬもので、當に理に叶ふ怨恨、即ち菅公の怨恨の如きをいつたのであることである。平安時代の終の頃に道賢上人冥道記（又は日藏夢記とも稱せらる）といふものが現はれた。扶桑略記、元亨釋書、其外菅神のことを記した平安末以後の諸書に普く引用されてある。其の記の由來は天慶四年八月一日道賢突然冥道に赴き、我れは執金剛神なりと稱する禪僧に逢會した。其の神は道賢に藏王菩薩を紹介して、道賢をして此の菩薩と問答せしめた。所が其菩薩といふのは、菅神であつたので、普く菅神の有樣を知り、同年同月十三日寅時、再び蘇生して此娑婆に還つて、始終を記した

云々といふのである。天慶四年頃作られたものとするには多少の疑ひはあるが、其以後の平安末期に出でたものとなすには異論はあるまい。其の文中に、

太政天（大菩薩のこと）曰、我起上人本國菅相府也、世三天呼我字日本太政威德天、我初相當愛別離苦之悲、非不動我心、故我欲臍亂臣君、損傷人民、殄滅國土、我主一切疾病災難事、我初思念、用我生前所流之淚必滅彼國、遂爲水海、經八十四年後成立國土、爲我住城也、然而彼所有普賢龍猛等、盛流布密教、我甚愛重此教、故昔日怨心十分之一心思息也、加以化身菩薩等非願力、故假名神明、或在山上林中、或住海邊河岸、各盡智力卷懇論我、故未致巨害也、但我眷屬十六萬八千惡神等、隨處致損害、我偏難禁、況餘神乎（後略）

とある。更に大菩薩の敎示の他の條には

彼日本太政天者、菅公是也、其眷屬十六萬八千、毒龍、惡魂、水火、雷電、風伯、雨師、毒害、邪神等、遍滿國土、行大災害、國土舊善神、不能庶止、又去延長八年夏、震雷清貫、希世朝臣等、卽此天火第三使者、火雷天氣毒王之所作也、（下略）

など說いてある　太政威德天神の怨靈にて、雷火天神が最も威を振つたと信ぜられたのは、延喜以後は火災及落雷頗る多く、之を以て皆菅神の怨靈とされたのである。私は北野神の勸請の起原は太宰府の菅神とは關係のなかつたものと信ずるのみならず、菅原道眞の怨靈一條には關係なくして、雷公を祀られたのではあるまいかと思ふ。といふのは、西宮記に

延喜四年十二月十九日、此日使左衞門督藤原□□令祭雷公、此祭本意訪左大臣曰、此故太政大臣昭宣公、元慶中爲年穀祈、雷公有感應、因每年秋必祭之、仁和中不祭、寬平初年、頗不祭、彼時奏元慶、祭雷公故事、太上法皇因之臨時令諸司祭有驗、自爾以來、祭之不絕、今因之爲豊年、可祭、又不可以季冬祭之、此度事□俄附故、因循年來之例、

とあるを以て見ると、雷公を北野に祭つたことは、菅神の怨魂が威を振ふ前の事である。或は後人此の北野雷公祭の例から考へ及ぼして、天曆元年に菅神が近江國比良宮禰宜の神良種の男太郎丸に託宣せられたといふので、やがて北野に祀られる

ことになつたのではあるまいかと思はれる疑ひがある。太宰府の天滿宮を火雷天神とは稱へたことは古くはないやうであるが、北野の天滿宮は特に火雷天神と稱へられしも之に關聯して考へて見る必要はあるまいか。それはとにかく菅神の怨靈は火雷として最も威力を示したのである。

總じて此時代に於ける菅神の信仰は怨恨の惡神として畏敬されたのである。而して斯の如き方面に其の信仰を著しくしたものは、曩に述べた如く祈禱佛敎、就中眞言宗の人々が其修法の萬能を示さんとする爲めに之を高唱した疑ひが頗る多いのである。前に引用した道賢冥道記にも、菅神が其怨靈を慈にしやうと思ふが、併しこゝは密敎が盛んに流布する國故、我が愛重する敎に免じて、怨心の十分一に思息むのであると明記してある。又同じ記の中に、太政威德が、道賢上人に誓ふ次の言葉がある。

但今日爲我上人、遣一誓言、若有之、信上人、傳我茶、作我形像、稱我名號、有懇願祈禱者、我必相應於上人耳、但上人有短命相、懼精進、莫懈怠云々

則ち菅神は上人即ち道賢を信じ、道賢上人を信仰して此我れを祈る者あらば、我必ず道賢上人の祈に應じやうと稱した。而して此道賢の敎法は明白でないが、恐らく密敎の行者であつたらうと思ふ要するに此道賢冥道記は道賢の祈禱、乃至眞言の功德を稱揚せんが爲め菅神の怨恨の怖しきをかりて來たやうなものゝ如く思はれる。又政治要略二十二、北野天神會の條に、本書の著者なる惟宗允亮が寛弘四年河內守となつて、翌年同國大縣郡に住んで居た時に、同地の普光寺に、僧幡慶といふ者が居た夙に高野山に遊學しやうとしていまだ果さなかつたが、一夜夢に登山して弘法大師に謁した。大師彼の僧に告げて曰はるゝには、

吾弘法大師是也、汝遲來此地、若思食難歟、至于衣食、吾自可與持、天台六十卷可來爲見也、菅丞相者我遷世之身、野道風者我

順世之身、今稱天滿天神遍滿世間、結緣衆生也（下略）

これで見ても、當時菅神と密教との關係の淺からざる所を察するに足りるのである。

併し此時代とても、多少菅神の他の信仰も皆無といふことは出來ない。併し甚だ稀薄であることは否まれぬ事實である。此の時代の菅神の信仰を述べ終るに際して、鎌倉時代になると諸社の神人神官が起請文をかく場合には必ず北野社の社前に於てすべき掟が出來たことに就いて、一言しやうと思ふ。此事實は三浦周行先生の示教に得たものである。新編追加の文に

一諸社神人并神官等、令書起請文時、於他領社、不可書由事、
有於京都者、不嫌自社他社於北野社可被書也、
仁治元年　十二月十六日　　前武藏守

とある。如何なれば起請文は北野社に於て書かしむる樣に極めたのであらうか。之は菅神は正直を保護する神といふ信仰が、鎌倉時代に起つたから



それに起因すべき理由もあるが、又菅神が梵天帝釋天宮に昇つたといふに關係する者も多いのであらう。即ち梵天帝釋が多くの眷屬を率ゐて非違を檢斷する神といふ信仰があつたので、古來起請文を書く時には、第一に此の天に誓ひをたてることになつて居た。有名な貞永式目に附いて居る誓文にも、

（前略）若雖爲一事、存曲折、令違犯者、梵天帝釋、四天王、惣
日本國中六十餘州大小神祇（下略）

とある。北野神即ち梵天帝釋天宮と信ぜられたから、北野の社頭で誓旨を立てるのを有効としたのではあるまいか。或は梵天帝釋を、大梵天王と誤つた信仰から起つたのかとも思はれる。それは大梵天王は清淨天といひ、婬慾を超脱した梵天國の王であるから、起請文の誓旨をたてる神として、最も有効と考へ、之を北野神に附會してかくは行ひ慣はしたものかとも思はれるからである。

## 鎌倉時代

平安時代には、專ら怨恨の神、風雨火水の支配神にして、罪惡の罰すべきものを懲すといふ荒神の意味に信仰せられた菅神は、鎌倉時代の中頃より、其の終の頃にかけて、寃罪を救ふ神として利生を示し、ついでは如何なる所願でも、一心一向に菅神を祈念する者には必ず成就せしむるといふ慈悲救濟の神となり、轉じては後生をすらも助くる絶對慈悲の神となつた。謂はゞ菅神は祈禱の對照から信仰の對照へと變化した。現世的の神祇から轉じて來世的に變じたのである。勿論一方には依然怨恨の神、惡人懲罰の火雷風雨神とする信仰も絶えなかつたのではあるが、世人が餘り其方面の信仰をもてはやさなくなつた。

尤もかゝる鎌倉式の天神信仰は、突然此時代に至つて勃興したものではなく、既に前時代から多少さういふ傾向は見ゑて居たのである。天曆元年三月十二日近江國比羅宮の社人に下せし託宣といふ文中に、諸の雷神鬼神をして惡を懲したことを述べ。更に

世界ニ佗昌比悲天衆生ヲ見給何天救ヲ止耳者思次
我筑紫ニ有之程ニ常ニ佛天ヲ仰天願之樣波若命終雨波當生ニ如我久慮外
乃災ニ過ヲ人、總天佗悲無者ヲ波助救比人ヲ沈拍世ヲ者ヲ紀須身ニ生ニ願
之ヲ、如思成多利（扶桑略記より引用す）

とある。之れに據て、平安時代の末には、かゝる信仰が、稀にあつたのである。罪惡を犯す者を糺さうといふ信仰より、一轉して寃罪に苦む者を救濟するといふ信仰に發展せる路が、頗る明白である。更に鎌倉時代になると、一層これが明瞭となり、多くの例話などさへ附會さるゝことゝなつた

鎌倉時代の中頃より、南北朝時代の頃にかけて天滿宮の緣起數種世に現はれた。今左に其詞文見たものを列擧すると、

（一）北野緣起（群書類從神祇部所收上中下三卷）
（二）北野事蹟（北野誌所收、一卷）

（三）天　神　記（北野誌所收、上下卷）
（四）北野天神緣起（續群書類從神祇部所收、一卷）
（五）北　野　本　地（續群書類從神祇部所收、一卷）
（六）荏柄天神緣起（群書類從神祇部所收、一卷）

右の內で（一）この北野緣起は承久の作なること、同書の中に『仍寬弘元年始に行幸ありき。承久の今に至るまで』云々とあるにて知られる。（二）の北野事蹟は其後いつの頃にか、北野緣起を敷衍したるものであるが、其時代は今明かでないけれども之を敷衍した者は儒敎思想に支配せられたものらしく、素より鎌倉時代の終りの頃のものかと思はる。然らば如何に儒敎思想に支配せられた人に依て敷衍せられたかといふに、北野緣起の結末の段に「凡天神に心ざしをいたし、歩をはこばんともがらは、いか成のぞみかむなしかるべき」と結んで居るのを、北野事蹟には「おほよそ天神信仰申さむ人は、まづ忠孝をさきとし、是非をわきまへ正直を存じ、慈悲の心ふかくて、人をたすけ、民をやすくして、なにごとにても、どうりをそむかず祈禱申さんことは、とき日をめぐらさずして、まん願成就せんこと疑ひあるべからず」といつて居るなど其一例である。

次に（四）の北野天神緣起も亦北野緣起を漢譯すると同時に、多少敷衍したものである。併し其製作年代は北野事蹟よりは古いであらうと思はれる（三）の天神記も亦北野緣起を本として作つたものである。北野誌所收の奥書の文に『永德三年癸亥二月日、前大藏權少輔從五位下藤原光增畫圖之』とあるから、此頃出來たものであらう、かやうに緣起に數本はあるが、大方北野緣起が根本であるたゞこゝに（五）の北野本地は前述の諸書と關係が少ないやうで、實は大に似たものである。其製作年代は北野緣起よりは少し新しい樣であるが、併し南北朝時代には下らぬ頃のものと鑑定する。（六）の鎌倉荏柄天神緣起は北野本地と直接本末の

關係あるものと思はれる。恐らくは荏柄天神緣起が本であらうか。荏柄天神緣起の奥書によると、之は元應の作と見ることが出來る。

此外天神信仰に就いては鎌倉時代に現はれた古書に一箇所や二箇所、筆を用ひないものはないと謂つてよろしい。即ち、古事談、續古事談、十訓抄、著聞集の如き敎訓書は勿論愚管抄、百練抄、吾妻鏡、源平盛衰記等の史書、其外歌書等にも其の記載が頗る多い。之等多くの鎌倉時代に現はれた書物に見ねて居る菅神信仰は、怨恨神、荒神等の性質を失つて、專ら慈悲の神、雪寃神、進んでは後生救濟神として利益を示して居るのは甚だ面白い所である。

菅神が一向一心に祈らば如何なる祈願をも成就さすべしといふ信仰は、諸書に其例頗る多い。北野緣起に承保の頃西の京の七條通りに住むで居た銅細工の女二人、繼母に事ふるを歎き、亡き生母に事ふること能はざれば、命を召せと祈願精誠を込めしかば、天神即ち二女を救ひ、一人は播磨守有忠の妻となり、一人は宮仕へさせ給ひし云々といふ話がある。之れ等は菅神の慈悲の普きを語る好例話である。

菅神が無實の罪を糺し正直なる精神を擁護する神となつたことも著名な例がある。待賢門院が皇后で在した頃に、さる近侍の女房が着物を失つたことがあつた。ある一人の女房之れを盜んだといふ嫌疑を蒙つた。其女房身に覺ねなき寃罪であるので、大に憤つて北野の社頭に至りて

思ひきやなき名たつ身はうかりきと現人神に成し昔を

と讀みて奉りしに、其の日の中に、之を盜んだ眞犯人なるはしため、其着物を抱きて鳥羽天皇の御前にあらはれ發狂したといふ話がある。之れは前の北野緣起及び其類書及び著聞集（二書とも奉献の歌の上の句に多少の相違あり、思ひいづやなき

名のたつはとある）等皆此話を傳へて居る。

又同じ信仰を物語る話に、鳥羽院の御代、世尊寺に阿闍梨仁俊といふ高德が居た。此人に對してある女房が、此の僧女心ありと、鳥羽天皇に讒言した。之を聞いた仁俊大に憤つて、北野の社にお籠りして

と讀み奉つた。すると其女房は紅の袴ばかりはいて、錫杖を携へふりて、仁俊にそら言いひつけたる報いよと獨語せしかば、天皇使を北野に遣はして仁俊を御召しになつたといふ話があるかくて菅神は罪を雪ぎ、飽くまでも正直を守り非道を懲す神となつた鎌倉時代に起請文を此の社で書かしめることにしたのも、一はかゝる信仰に起因することであらう。

進んで菅神は今や往生極樂をすら守護する神となつた。後三條天皇の御代に仁和寺の池上の僧西念が北野社に百日參籠して、臨終正念、往生極樂を祈願した。すると北野神の託宣に『汝が望申事たやすからずといへども、心ざし念頃也、來年二月の彼岸の結願の日の朝を待べし、そのほどおもひ忘るゝことなく念佛すべし、いかなる人も志をいたせば、往生はやすき事なり共、臨終に魔緣きほひてとぐる事かたし』云々（北野緣起）とあつたといふことである。又北野本地、荏柄天神緣起等に、其功德を稱へて、

凡官位福祿智惠、臨終正念、往直極樂ののぞみ、何事も申にしたがひて叶はぬはなし

と說くところがある。

斯の如き菅神の信仰は、念佛往生全盛の砌り、其影響を受けて、かくは便方化現を見るに至つたのであることは、何の說明も要さない事である。此の信仰の變遷は鎌倉時代の初め、承久前後より鎌倉の末頃までに判然と認めらるゝのである。曩

に列擧した諸種の緣起は北野緣起（或はいふ北野根本緣起）を本として鎌倉時代の末に至るまで順次作られたもので、其內容は略ぼ同じである。以上諸種の緣起の外國寶帖に周防國佐波郡防府町松崎天神緣起といふがある。之れも恐らく右諸緣起の類本かと思はれる。かく其數の頗る多きは、菅神信仰の發展と共に、諸國に北野天神を勸請し、自然それ〴〵に緣起を作るもの、多かつたからである。而して其緣起を作るや、詞は大概承久の北野根本緣起に據り、之れに若干添削を加へ、變文したものである。尤も此根本緣起といふも、何か又據る所のものがあつたかと思れる疑ひはある。かくて圖繪の詞は大概同じもので、一見何等價値なきやうに思はれる。けれども、吾人の菅神信仰の沿革的研究に取つては、一々貴重なるものである。同じ鎌倉時代に於て出來たものでも、承久頃と仁治や元應頃に出來たものとでは、信仰上著しい發展の跡を見ることが出來るのである。前述せるが如く、北野根本緣起には、菅神は慈悲の神、所願成就の神、保善懲惡の神、雪冤の神といふ信仰は明確に現はれて居るが、後生救濟の神といふが如き信仰は十分見ることが出來ない。所が北野本地や、荏柄天神緣起には、臨終正念、往生極樂をも得させる神と明記されるやうになつたのである。斯の如き變化は吾人が最も興味を感ずる點である。

鎌倉時代の菅神信仰を述べ終らんとして、こゝに附言して置きたきは菅神の往生保護といふ信仰と、天神の本地は觀世音菩薩であると信ぜられたこと、、關係の多いことである。天滿天神と觀音とが本迹關係を結ぶ樣になつた來歷は、餘り明白でない。强ひて之れを求むれば、嘉承元年十二月陳經（菅原）と奥書のある菅家御傳記に『安樂寺學頭安修奏狀云、太宰府安樂寺者、贈大相國菅原道

眞公喪葬之地、十一面觀世音大菩薩靈應之處也』とあり。又北野古緣起（群書類從所收、漢文本）に北野に三間四面の堂一宇を建て、觀音菩薩の像を安置することあり。之れ等の事實などが、恐らくは其源委の一つであり。それに平安時代の末から鎌倉時代の初めにかけて、菅神が慈悲の神となつたことも亦觀世音と結びつく一つの源委となつたであらう。そはともあれ、天滿天神の本地は觀音なりといふことは著しい信仰となつた。愚管抄にも『天神ハウタガヒナク、觀音化現ニテハ末代ザマノ五法ヲマジカク、マモラント思シメシテ、カヽルコト（時平の讒言より道眞左遷せらるゝこと）ハアリケルト、アラハニ知ラル、事也』と見ゆ又北野緣起、天神記等には『本地を尋ぬれば、觀音の垂迹なり、慈悲の弘誓淺からず』と明記してある。而して淨土敎の方では觀音は彌陀の想門をは現すものとするから、自然念佛往生に深くゆかりありと信ぜらるゝやうになつた。

北野誌に天神講私記といふものが載つて居り、菅原爲長御作云々の奥書はあれど、遽かに信ぜられぬ。何々講式（太子講式、報恩講式等南北朝前後に作られたるもの多し）の多くの例にもれず、早くとも鎌倉時代の終りか、南北朝時代に出來たものと思はれる。が本文中に『仍爲貴天滿天神之威、始自元久元年之夏城北之神祠每月設十八日之會云々』とあるから或は其の頃の作でもあらうか。それの第四條、來世引接を憑む願文の終りに、

如來薩埵（觀音）之名、雖異彌陀、卽觀音、觀音卽彌陀內證、外用之權惟一、觀音是天神、天神是觀音、然則傾敬神功、爲成佛之計預觀音之來迎、詣彌陀之營刹、亦何疑乎不悅乎仍以伽陀可讃嘆禮拜曰、

願我臨欲命終時、　盡除一切諸障碍
面見彼佛阿彌陀、　卽得往生安樂國
南无歸命頂禮天滿天神本體觀世音菩薩

とある。之れも正しく菅原天神を後生救濟に引き入れるやうになつた一の徑路であることが明瞭であらう。